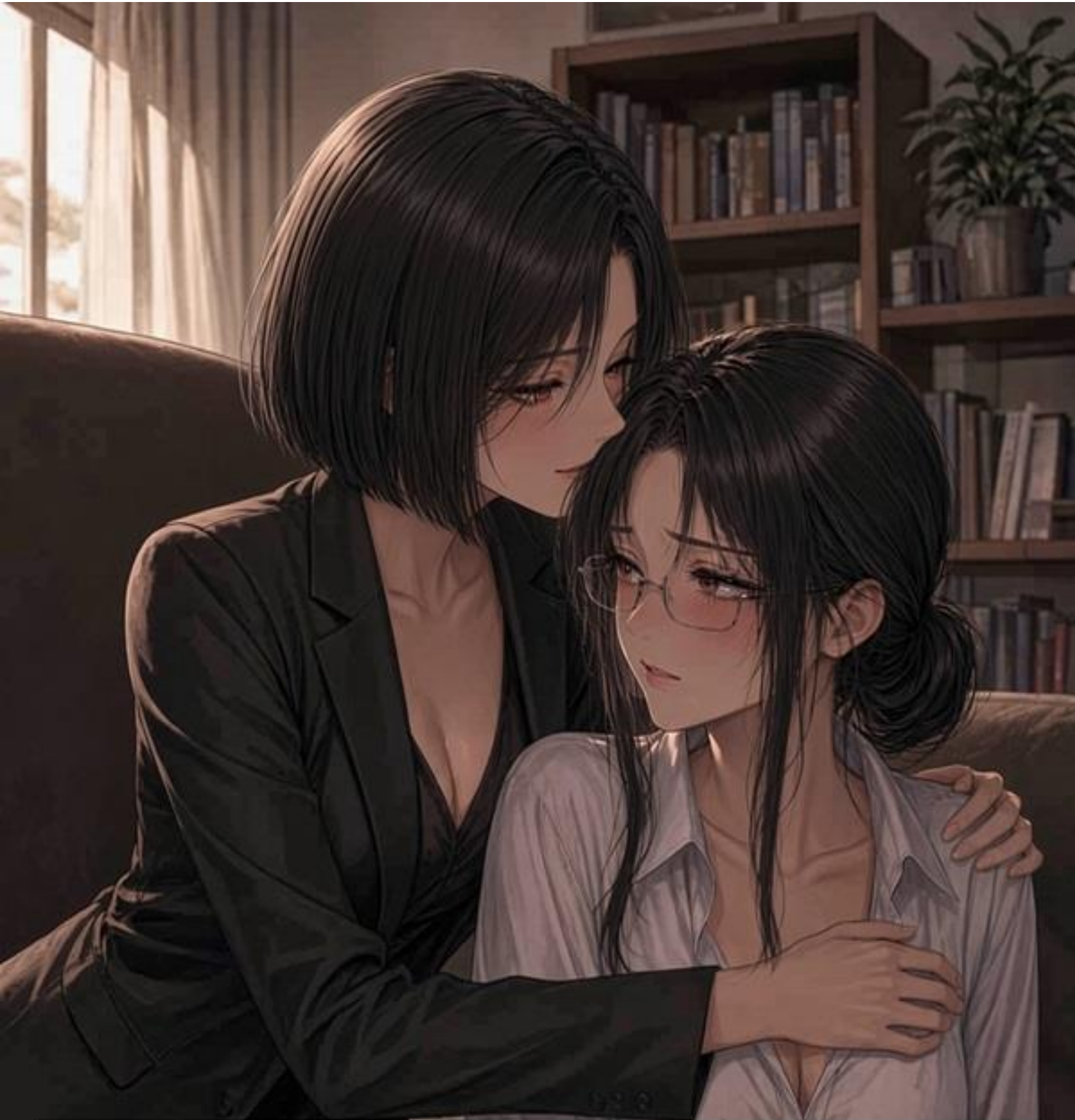




**レズな訪問販売員が
秘密の『初心者サポート』で
お客様を何度もイかせ続ける**

【体験版目次】

プロローグ	 1
第一章「玩具お試しと淫らな期待」	 3

プロローグ

保乃花がインターホンを押すと、中から若い女性が「こんにちは」と言いながら顔を出した。黒いロングヘアを軽く束ねていて知的な印象を受ける。

「英里紗さん、ですね。本日は訪問販売をご依頼いただきありがとうございます。保乃花と申します」

英里紗は会釈をしてから保乃花を部屋に招き入れる。保乃花はソファに向かい合う形で座り、穏やかな声で切り出した。

「早速なんですけど、もしよければ、おもちゃに興味を持ったきっかけをお伺いしてもよろしいでしょうか？」

英里紗の長い睫毛がわずかに揺れ、視線が床に落ちる。ふっくらした唇が開きかけ、すぐに閉じた。

保乃花は少しだけ体を乗り出し、営業用の柔らかい笑みを浮かべる。

「皆さんいろんな理由でおもちゃをお買い上げになるので、恥ずかしがることはありませんよ」

英里紗は小さく息を吸い、視線を戻して「実は私、レズなんですけど…」と切り出す。

「前にバイブで責められたことがあって…その時の気持ちよさが…忘れられなくて…」

保乃花は表情を崩さずに英里紗の言葉に耳を傾ける。顧客名簿の情報から、英里紗がレズであることを保乃花はすでに知っていた。

意地悪な笑みが溢れそうになるのを抑えながら話す。

「それでしたら、いい商品をたくさんご用意しております…」

第一章「玩具お試しと淫らな期待」

保乃花はバッグからいくつかのバイブを取り出した。
様々な形状、サイズของものが揃っている。

英里紗はそれらをじっと見つめる。知的な表情の奥にはかすかな興味が滲んでいる。

「すごい…いろんな形のものがあるんですね…」

「人によって好きな形状は違うので、まずはいろいろ試してみるのがいいんですけど…」

「試す…」

「どれか気になるものはありますか？」

英里紗の視線がそわそわと、並べられたおもちゃの上を動いていく。指は無意識にスカートの裾を掴んでいた。

保乃花は英里紗の緊張を和らげるために、一つのおもちゃを手取る。

「ちなみに、私はこういうのが好きですね」

保乃花が手に取ったのは、真っすぐでシンプルな形状のバイブだった。しかしスイッチを入れると。

ブイン、ブイン、ブイン…

バイブの先端がピストン運動を始める。

「うわぁ…」

英里紗の喉がごとりと鳴る。

「これで奥をリズミカルに突かれるのが気持ちいいんですよ」

保乃花の告白に英里紗の羞恥心も多少は和らいだよう
で、バイブを眺める目が真剣になる。

「触ってみてもいいですか？」

「もちろんです」

英里紗は一本のバイブを手に取り、丁寧に撫でながら、素材や硬さを確かめていく。

「もしよければ、実際に使って試してみますか？」

「えっ？」

英里紗の声が上ずり、バイブを持つ手がわずかに震える。

「もちろん、私は席を外しますので」

「でも…その…声とか…」

「大丈夫ですよ、私は慣れてるので気にしませんから。ちゃんと試して、自分に合ったものを使うのが、一番気持ちよくなれるんです」

気持ちよくなりたい、という感情を揺さぶるのが一番効果的だということを、保乃花は知っていた。英里紗は俯いたまま小さく頷く。

「ここにあるものはどれでも自由に試してもらって構いませんので」

保乃花は静かに立ち上がり、「それでは、ごゆっくり」と一礼してから部屋を出て行く。

保乃花が玄関スペースに腰を下ろし壁に背を預けると、しばらくの沈黙の後でドアの向こうから微かな音が漏れ始めた。

まずは息を殺したような吐息。そして、徐々に熱を帯びた喘ぎ声がドア越しに聞こえてくる。

『んっ…あんっ…』

低く抑えられた声が、時折高く跳ねる。さっきまでのおとなしめの声色とは違う、甘く掠れた声が断続的に響いた。保乃花は目を細める。

(英里紗さん、予想以上に楽しんでもみたい…これなら、うまく誘導できそう…)

これからのことを想像しながら、保乃花は右手をゆっくりとスカートの裾へ滑らせる。指先がショーツの生地に触れると、すでに熱を帯びた秘部が小さく疼いた。息を殺し、ショーツの上からクリトリスをなぞる。英里紗の喘ぎ声が聞こえるたび、指の動きがわずかに速くなる。

「……っ」

保乃花の唇が無言のまま小さく開いた。英里紗の声がまた一つ、甘く漏れてくる。

『あっ…はうんっ…』

抑えようとしているが、我慢できずに漏れてしまうような声。その声を聞きながら、保乃花は自分の指を静かに動かし続ける。

（英里紗さん…我慢しなくていいですよ。どうせこの後、喉が枯れるほど喘ぐことになるんですから…）

保乃花の指はすでにショーツの中に入っていた。

くちゅ…くちゅ…ぬちゃ…

『くうっ…んああん…』

保乃花の秘部から漏れる淫らな水音と、抑えきれない英里紗の喘ぎ声が、廊下に静かに響き渡る。